

御 厩 堀

岡田美知代

「私がかうして何時迄も獨身で居ますには、種々深い譯がありますの」と某と云ふ老嬢は話し初めた。

父母は幼い頃に死んでしまひ、私は伯父伯母の情の手に人となりました。伯父と云ふのは古い工學士で、其頃中國のさる地方の町に鐵道技師を勤めて居りました。で私も其處に連れられて、子の無い伯父伯母は私一人を可愛い者に、何不自由もなく暮りましたが、親の無い子によく見る、私は洗んだ性質で無口な泣き虫の、ともすればこつそり物陰に考込んで居ようと云ふ至つて鬱鬱な、可愛氣の無い子供でありました。ですから自然一處に遊ぶお連も無く、同じ年輩の誰彼が面白可笑しく笑ひ興じて居るひまに、私は獨りで繪本を抱いて、山蔭のしめつばい處を處々と好んで行きました。わけても氣に入つてよく行き／＼したのは二丁ばかり町を離れたお城山、麓は公園のやうに成つて居て節句お祭りの物日には、お重節持つて終日をそこに遊び暮す人もありますが、少し上つてお厩堀と云ふのがある。それは昔若侍共の風儀の素れを噴いて、時の城代某が、假初にも武士と生れて遊惰に流るゝ者ある時は、誰彼の容赦無く皆死罪に處すと云ふ嚴しい控を發布した。と第一に禁を犯した者は誰であらう城代の一子主水なので、それと知つた城代は殘念の齒をかみ乍ら只一刀の下に斬り捨て、死骸を御厩堀に墮落した。それ以來此處に身を投げて或は誤つてあへない最後をとげる者が絶えぬので、誰云ふともなく主水の祟と云ひ傳へ、大きいと云ふではないが、底が蒼蒼んで如何にも深相で、兩側の堤に押寄せつたやうに思ふ繁つた葎やキムの前に、乳色の忍冬がからんで匂つて、何だか物凄く、人里には離れて居るし、淋しくはあり、羨ら總物の私も多少薄氣味悪さに、おぞけ立つ事も無いではないが、白晝でさへ森として居て、止むない用事のない以上、誰一人此處りを通る者はありません。私はけつ／＼それを好い事に、松の段と云ふ御厩堀のすぐ横手の小松原に坐つて、はてしもない空想に耽り、孤獨を楽しむのでありました。

あゝ、其御厩堀!

或日の夕暮、私はいつものやうに只一人松の段に坐つて居りました。ふと人の氣勢に振返つて見ると、お城山から下りて來たのでせう。旅人らしい若い男女の二人連れ、手を組んで睦しげに笑み交して居るさまは幼い私にも新婚の人達か、互に許した戀仲と直ぐに知れるのでありました。小松原に先方では見る者ありとも氣附かぬ様子で、私の直ぐ傍を通り越し御厩堀へと進りましたが、

「あら忍冬よ、貴那奇麗ぢやありませんか、私記念に取つてくわ。」女はいと／＼一寸と金釋して、さして居た編蝠傘を閉めもせず、其儘男の手に預ける。

「およし／＼、危いぢやないか、下を御覽なさい。」

「然うねえ。」云はれて流石にたちろいだが、直ぐ又は、と笑つて「貴那さへ確り捕つて、鼓下りや、私些少も怖かないわ。」

「ではおとり、僕しつから捕つてるから。」

男に帶際とらせて堤の上をほひ、キムの枝に片手をかけた女は、あれかこれかと花美しい忍冬をとらわびて、宛ら其真下に世にも物渡う湛えた淵瀾のある事を忘れても居るかのやう。と男は急に手を離し、あなやと思ふ間もなく女の肩を一衝ついた。つかれて女は如何して無事で居られませう、つかまつて居た枝も折

れ、ばさりと打撃つた木の葉をわけて落ち行くのでありましたが、アツと聲立て、此方を振り返つた利那の顔、驚きの餘り口は開いた儘、男の面をきつと見据ゑて、怒めし相な其眼、私は今尙まぎ／＼とめさきにもらつたので。

男は暫く淵を見入つて立つたが、やがて四邊を見廻して、急に周章てた様に大聲擧げて人の助けを求めながら腕をさして下りて行つた。私も續いて起ちました。町端れ迄来て見ると先刻の男は今し駆け付けた計りと見え、息せき乍ら其妻が誤つて御殿場に落ち込んだと話し、せめては、其死骸だけでもとりとめ度いと訴へて居る、人々は騒ぎ立ちました。

男の故意か女の過失か、それは知るよしもありません、殊に女は男の妻だと云ふ、二人の睦しさを知る私には男の言葉の信せられぬでもありません、けれど私は又まのあたりある事を見せられて、如何しても故意としか思はれません。私は年と共に陰鬱に、殆んど病的に人知れぬ罪と云つたやうな事を考へるのであります。絶えず残忍な男の面と、怒めしげな女の顔が目について、私は一生忘れぬ事は出来ませぬ。

それから七年後、私が二十二の年で御座います。其頃は既う伯父の一家と一處に東京に歸つて居ましたが、派出の都の生活も私の往來の性格を變へる事は出来ません。伯父伯母はそれを薄く氣にして、年頃でもあり結婚でもしたならと種々世話して呉れましたが、この人ならばとすゝめられたのはYと云ふ新歸朝者で、私も遂に其氣になつて見合する事になりました。

愈々其日が来て私は胸おどろ／＼待て情えて居りますと、まあ如何でせう。思ひもかけない、Yと云ふのは例の男なのです。初め私は心の迷ひかと、思ひましたが、七年間忘れぬ間もない其眼其口、如何して間違ふ筈はありませぬ。其内に伯父伯母の愛を利かして申す事も、實に二人は、慥に二人は、慥に二人は、別は三十四

五にもならずと云ふに、丸で小學生徒が初めての受験と云つたみえで、私の快諾を頼よと云つた意味を、長と吃り乍ら申しました。私は少しく思ふ處あつて、新婚旅行の地を私に選ばせて呉れるかと訊きました。餘り突然なので男は一寸と變に思つた様でしたが、それは最う内地は云はずも、スイス、伊太利、何處へでもと云ふんです、私は思ひ切つて。

「D町にして頂きますなら……」そつと男の様子を窺ひますと、思ひなしか眉のあたりをひり／＼と震はせ乍ら、わざと平氣を装ふて色も變へません。

「お城山の御院漏つて、それは美しい忍冬が咲きますの、私子供の時よく行き／＼しましたから、何だか懐しくつて、是非其處にして頂き度う御座います。」

「おやすい事で。」

「御存じかも知れませんが、それは物凄く漏で、随分怖う御座いますの、ですけ共、貴那さへ確り捕つて下さりや、私些少も怖かないわ。」

斯う女の言葉を引用しました、流石に男は色を失ふのでありました。

而して私は今日迄獨身で居りますの。

をばり